

## 平成26年度水城東門跡の調査

太宰府市教育委員会 文化財課

今、つながる水の城、山の城

水城・大野城・基肄城  
築造1350年

筑紫野市・春日市・大野城市・太宰府市・宇美町・基山町

今年は大野城が築造されて1350年にあたります

## 1. はじめに

水城は、1350年前に築かれた古代の**防衛施設**です。

西暦664年（天智天皇3年）、前年の白村江の戦い※1で唐・新羅に敗れた日本（倭）は、福岡平野から筑紫平野へ向かうルートをつさぐよう、長さ約1.2kmにわたり、水を貯める幅広い濠と、高い土塁からなる人工構造物・水城を築きました。

当時の人びとは、どんなに恐れをいだいたことでしょうか。そして、水城を築くのになんほど多くの人びとが関わったのでしょうか。水城の巨大さは、そうしたことを思い起こさせます。

その後、唐・新羅との関係もやわらぎ、対外交流も盛んになりました。大宰府では、政庁を中心とする古代都市（大宰府条坊）の整備が、奈良の都・平城京と同じころ進められ、外国使節のための客館もおかれます。このころ水城は、外国使節や都から赴任する官人を迎えるための、大宰府の境界（城壁・関）・出入口（門）となりました。

## 2. 水城を往来した人びと

## ○大伴旅人（665-731年）



古来からの大豪族・大伴氏の家系に生まれた大伴旅人は、720年代に大宰帥（長官）となりました。山上憶良とともに『万葉集』筑紫歌壇の中心的人物で、赴任中に多くの和歌を詠んでいます。天平2年（730）、大納言に昇進し平城京に帰るとき、水城で馬をとめ、見島という女性と別れの和歌を交わしています。



## ○藤原高遠（949-1013年）

寛弘2年（1005）に、大宰大貳（次官）として赴任しました。彼も大宰府で多くの和歌をよんでいます。赴任に際して、水城で府官（大宰府の官人たち）の出迎えを受け、印とカギを受け取りました。このとき次のような和歌をよみました。

岩垣の水城の関に 群れ迎ふ さきの心も 知らぬ諸人

## ○源俊頼（1055-1129年）

小倉百人一首にも名を連ねる大納言・源経信（1016-1097）の三男で、平安時代後期の官人・歌人です。父・源経信は大納言となった後、嘉保元年（1094）に大宰権帥に任じられ翌年赴任しますが、永長2年（1097）に大宰府で亡くなりました。俊頼も父とともに下向していましたが、父が亡くなると帰京します。このとき和歌を詠んだとみられ、京に上るため、舟で水城を過ぎたことがうかがえます。

かきたへて みつき になりぬ これやさは 心つくの かどてなるらん

右一首、筑紫にて舟よせ侍て後のほりけるに みつきと云所を出るとよめる

## ○安徳天皇（1178-1185年）・平家

寿永2年（1183）、平家とともに都落ちし大宰府に身をよせていた安徳天皇は、豊後の緒方三郎維義の軍勢三万が襲ってくることを聞き、平家一門とともに箱崎の津へ逃げました。雨の中、「水きの戸（門）」を通ったことを『平家物語』が伝えています。

※1 660年百済国が滅んだ後、百済の遺臣らは復興運動を起こした。日本（倭）へも使者を送り、日本に在住していた百済の太子・豊璋を王に迎え、あわせて救援を求めた。日本は、天皇（大王）自ら筑紫へ向かい、救援軍も渡海させたが、663年、白村江（韓国西海岸）で、唐・新羅の連合軍に大敗した。

### 3. 水城東門

都と大宰府とをむすぶ道は山陽道<sup>さんようどう</sup>と呼ばれ、「大道」とランク付けされていました。水城東門はまさに山陽道の終点であり、大宰府の入口でした。都からの使者や大宰府へ赴任する人びとは、ここで大宰府の官人（府官）の出迎えを受けました（境迎<sup>さかいむかえ</sup>）。ここから現在の関屋付近<sup>かろかやのせき</sup>（新萱関）へ向かい、大宰府政庁に入ったとみられます。この道は時代とともに規模やルートを変え、江戸時代には日田街道・宰府参詣道<sup>ひたかいどう さいふさんけいどう</sup>と呼ばれました。



#### ○礎石建ちだった東門

これまで東門跡そのものは見つかっていません。ただ、門の礎石<sup>かまくら</sup>が残っており、鎌倉時代の元寇（モンゴル襲来）時の記録にも、門が礎石のみとなっていたと記されており、平安時代まで、ここが礎石建ちの門があったのは間違いありません。

なお東門設置の記録はありません。ただ、奈良時代の中ごろ（天平神護元年・西暦 765 年）の水城修理の際の瓦窯跡が近くにあり、そこで焼かれたとみられる古瓦や埴（レンガ）が今回の調査で見つかっています。



## 4. 調査について

○水城跡整備 水城跡は、城跡としては大宰府跡とともに日本で初めて指定を受けた史跡です。指定が進んだ昭和40年代以降、福岡県・九州歴史資料館が調査・整備を行っていましたが、近年太宰府市・大野城市を中心に整備を行うことになり、平成17年度に協議会を設立し、保存整備にむけ検討を行ってきました。

太宰府市では、平成21年度から樹木整理や緊急性を要する土塁修復工事を行っており、これに加えて、遺構復元などを含めた本格的な整備に移行したいと考えています。

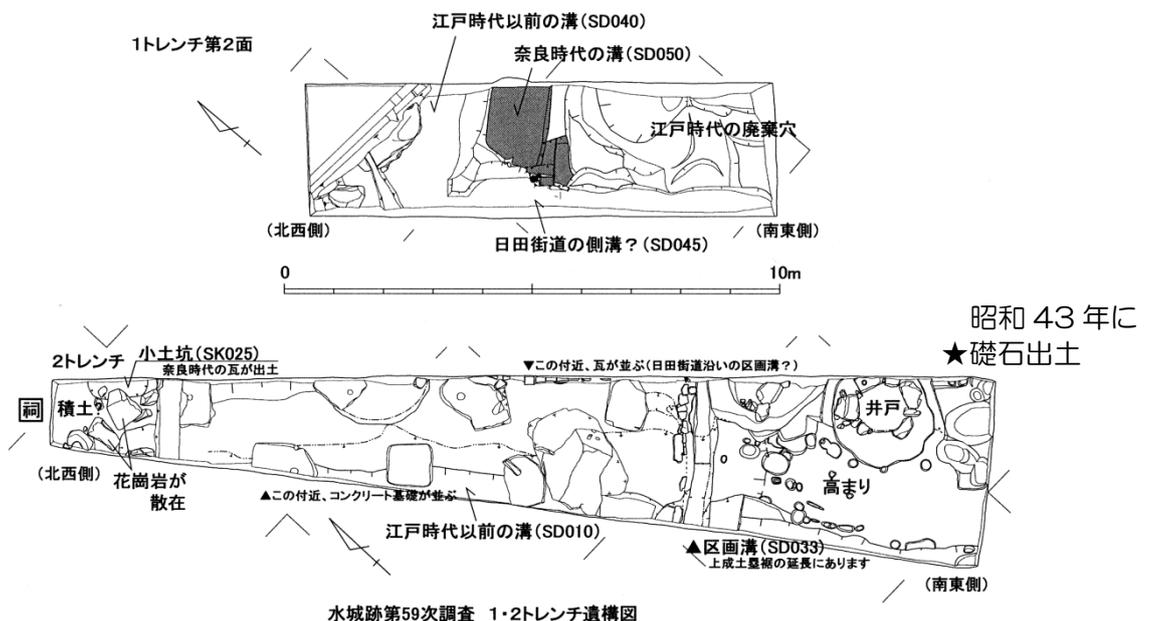
○調査の概要 今後実施する水城東門周辺の整備にむけ、今回、東門跡の遺構保存状況を確認する発掘調査を行いました（水城跡第59次調査）。

### 1 トレンチ（土塁の外側）

- ①日田街道の側溝とみられる溝SD045と、水城土塁に沿った溝SD040の、2つの江戸時代の溝が交差していました。
- ②19世紀初め頃、これらの溝を一気に埋め、新たな土地利用がはじまりました。
- ③この埋め土の中から、有田焼などの肥前陶磁などがたくさん出土しました。
- ④①の交差する溝の初現とみられる、L字に曲がる溝SD050が見つかりました。  
ここからは、奈良時代の古瓦のみが出土しています。

### 2 トレンチ（土塁の内側）

- ⑤水城の上成土塁の内側裾の延長上が土地の境となっていました。境には溝SD033が設けられ、その北西側は全体を削るなどの土地改変がくり返されたようです。
- ⑥⑤の境の南東側は、周囲と比べ土地を削る行為がほとんど無く、高まりとなっていました。昭和43年、この脇から礎石が見つかっています。
- ⑦この北西端（祠の脇）で積み土のような堆積が確認されました。調査範囲が狭く明確ではありませんが、東門の基礎などに関する堆積かもしれません。



水城跡第59次調査 1・2トレンチ遺構図

## ○調査のまとめ

**江戸時代～** 調査では、江戸時代・明治・大正・昭和にいたる遺構がそのほとんどを占めていました。細かな検討はこれからですが、水城土塁や日田街道などに沿って土地利用された様子を確認できました。

19世紀初め頃、1トレンチの溝などが一気に真砂土で埋められていました。東門門礎はこの整地の上に置かれており、このころ移設されたことが考えられます。

この時代、宰府参詣とともに名所旧跡をめぐる人が増えたようで、太宰府旧蹟全図（文化3年・1806年）・黒田藩による都府楼跡（大宰府政庁）の礎石調査（文政3年・1820年）など太宰府に関する絵図や記録が盛んに作られています。このころ書かれた『筑前名所図会』には、東門門礎が「鬼の硯石」と呼ばれたことを紹介しています。

溝を埋め整地した具体的な理由はわかりませんが、往来が盛んとなり家が新築された、あるいは都府楼跡のような史跡整備が、東門門礎の移設に伴い行われたのかもしれない。

**奈良時代～** 調査で見つかった古代の遺構はごくわずかで、1トレンチのL字溝、2トレンチ北西端の積土?の2つです。これに2トレンチ南東端の土地削平がなされていない部分（以下、高まり）が、古代の東門に迫るものといえます。

今回の調査では、以前礎石が出土した2トレンチ南東の高まりが門の基壇ではないかと調査を進めましたが、これは積土などではなく、また門礎をすえた痕跡なども見つかりませんでした。また、2トレンチ北西端（祠付近）の積土?を調査したところ、版築ではありませんでした。何らかの遺構（積土?）が広がっている可能性がうかがわれました。

これらを総合すると、東門の位置は祠付近にあった可能性がより高いといえるでしょう。東門は西門同様、上成土塁に取り付いていたと考えられる、ということです。

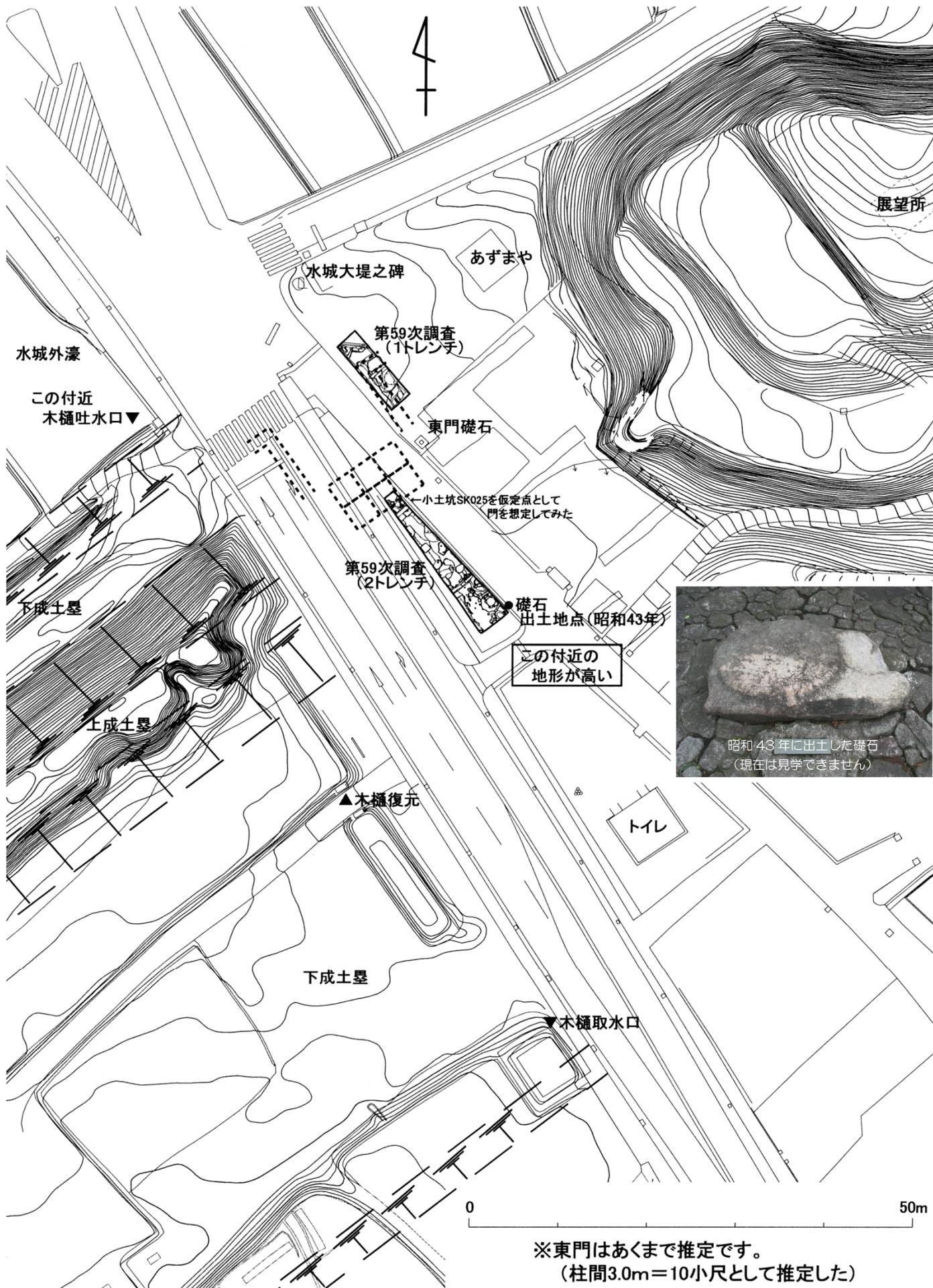
なお、1トレンチのL字溝(SD050)は、門の斜め前面を画する施設とみられます。L字溝の位置とこれまでの調査内容とあわせて検討することで、門のそばまで自然地形が迫っていたことがうかがえます。門の位置や景観の復元を考える上で大きな成果です。

出土した古代の遺物は多くありませんでした。ただ、見つかったのは奈良時代の古瓦・塼（レンガ）のみのようで、東門に使用されたものとみられます。これらはほぼ奈良時代後半のもので、天平神護年間の水城修理期のものとみて良さそうです。

このほか花崗岩の巨石がまとまって見つかったことは注目しています。平安時代の藤原高遠が詠んだ和歌に「岩垣の水城の関」とあるように、これは水城（・・・少なくとも高遠が見たであろう門の周辺）が石垣だったことを証明するものと言えるでしょう。

まだ東門の位置は確定したとは言いきれませんが、現状ではこれ以上、祠周辺を調査することは不可能です。今年度の成果をもとに、周辺で最も高くなっている2トレンチの南東側の調査を次年度行い、東門位置の推定を確実にしたいと考えています。

次年度はあわせて官道部分の調査を行うとともに、東門の北東側の自然地形復元整備に取り組む計画です。門付近の整備は次年度の調査を待って、その後行う予定です。



※東門はあくまで推定です。  
(柱間3.0m=10小尺として推定した)



周辺の文化財紹介：水城大堤之碑

ちょうど100年前の大正4年（1915年）、大正天皇の即位大典を記念に水城青年会が建てた碑です。碑の背面には水城の歴史と共に、測量の成果が刻まれています。

測量は、水城村出身の土木技師・竹森善太郎が10数日かけて行い、碑文は、上水城（国分村）の郷土史家・武谷水城が選書したものです。

水城頭章のシンボルとして、今も東門跡に立っています。



●水城大堤之碑（訳文）

天智天皇3年 筑紫に大堤を築き水を貯え名づけて水城と曰う。今をへだてること1252年。

称徳天皇の天平神護元年3月、大宰少弐 従五位下 采女朝臣浄庭を修理水城専知官とす。今をへだてること1151年。

今、東堤長さ176間3尺（約320m）、西堤384間3尺（約700m）、総長561間（約1020m）、最高所5間5尺（10.6m）、基盤の最広所19間1尺7寸（約35m）、中央欠堤所96間（約175m）。

西堤は近年中断し、二堤となる。

この所はすなわち東方関門の跡で片側の礎石が遺存している。その西方関門はすなわち吉松墜道の地なり。

この事業は、文化庁国庫補助を受けて行っているものです。  
また「太宰府市歴史と文化環境税」を使用しています。